

生前に行う 死後の 設計 コミュニティ

A posthumous design community,
created while alive

ある種、建築の原点とも言える”お墓”は、時代とともに変化し続ける。それは今この瞬間も例外ではない。そこで、今一度、お墓とはどうあるべきかを考える必要がある。葬送文化や死と向き合う機会自体が薄れてきている現代に、正解を求め続ける空気をつくりたい。“四則演算”は、課題を建築に結び付けるプロセスとして有効だ。社会も数字と同じように、 $+$ $-$ \times \div によって単純化も複雑化もできる。我々は、四則演算をフレームワークとして利用し、これからのお墓の在り方の1つを考えた。

現代におけるお墓文化について About the modern grave culture

1. お墓文化の変化

Changes in the grave

今日わが国では、都市部への人口集中、世帯構成の変化、死後や弔辞に対する価値観の変化により、お墓の在り方が問われている。

「維持・管理が難しい」

「顔も知らない先祖代々の墓ではなく、顔見知りの家族たちの墓に入りたい」

お墓が”現在の家族観念の延長”となり、人々の意識が、先祖供養という過去ではなく、自分の死後設計や子孫への負担などの未来へ向いていると言える。



写真④「結の会」個人墓 ⑤「縁の会」個人墓
東京都新宿区にある東長寺では、約30年前から永代供養付きの個人墓を提供している。どちらも三十三回忌までお寺で供養後、合葬墓へ入る。

2. 無縁墓の増加

unclaimed remains

お墓の継承者や縁故者がいなくなったり、管理費が一定期間支払われなかったりしたお墓、いわゆる「無縁墓」が年々増えてきている。

背景として、少子高齢化や地方の過疎化、価値観の変化により、お墓を継承することのハードルが高くなっていることが挙げられる。

個人墓（永代供養→合葬墓）

建築した個人専用で、継承することはできないタイプのお墓。多くの場合、納骨後一定期間を定めて霊園関係者が供養し、期限後は合葬墓に移される。

無形の墓

樹木葬（墓石の代わりに樹木を墓標として遺骨を埋葬するお墓の形式）や、散骨（火葬後の遺骨を粉末状にして、海や山、空などに撒く供養方法）など。

3. 個人墓や無形の墓の需要の増加

Increasing demand for private and intangible graves

無縁墓が増える理由と等しくして、それをお墓選びの段階で解決する、合葬墓や無形の墓などが近年増えてきている。

4. 無縁化社会の進行

The progression of an isolated society

お墓の変化は、社会の変化から来ているとも考えられる。

これまでの地縁、血縁の時代の墓は、永続性・固定性・尊厳性を持っていた。だが、近年、産業の変化や都市化の中で個人化社会となり、個人化・流動化が起きた。そして、これが作用して、お墓の有期限化・共同化・無形化を導いた。

しかしながら個人化社会が進み、とうとう私たちは無縁化社会に突入しつつある。家



制度から解放されて個人が自由に墓の形式を選択できるようになったことにより、死が個人化され、人の死が他者と関わらない”個人の死”としか位置づけられなくなる可能性が出てきた。

どんなに縁を切っても、人は社会に生きる生物である。“社会的存在としての一人の死”

“四則演算”による思考 Thinking with “arithmetic operations”

建築はあくまで手段であり、そのバックグラウンドには必ず社会的な意図や目的が存在する。本設計では、課題解決のプロセスとして、2段階の四則演算によるフレームワークを実行することにした。これにより、現代社会を丁寧に分析し、画期的かつ根拠に基づいた解決策を導き出し、それらを建築的にアウトプットすることができる。

1. 目標決定のための四則演算

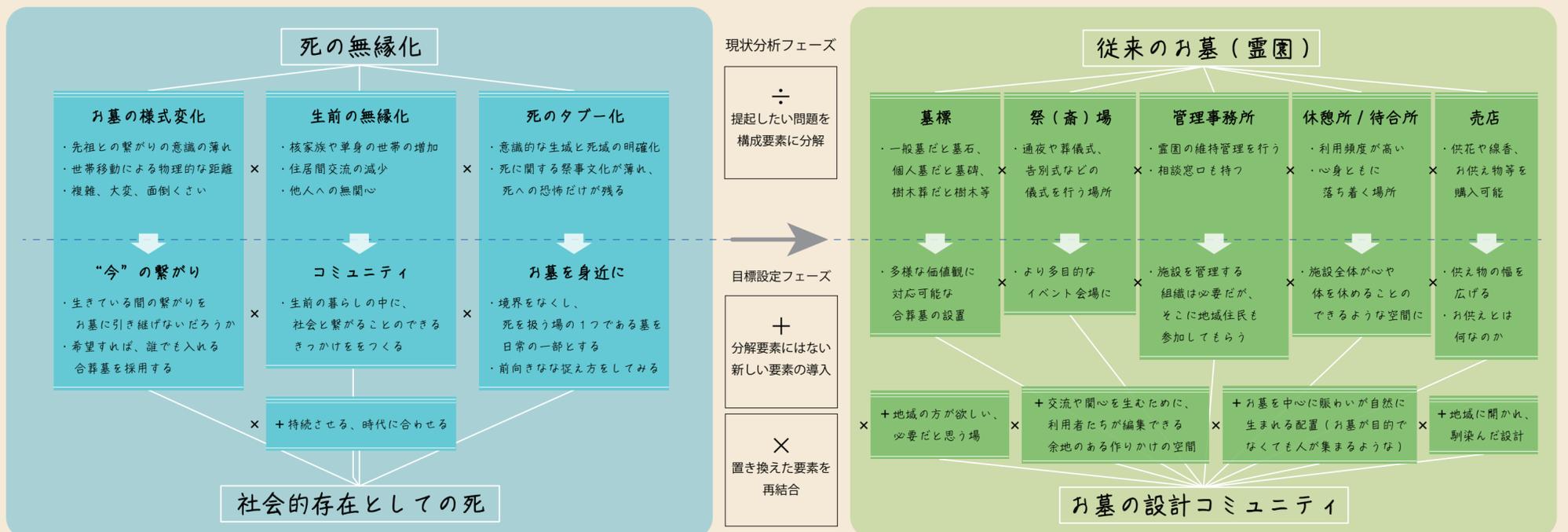
Arithmetic operations for determining goals

《課題分析と解決理論の構築をし、体系をデザインする》

2. 空間決定のための四則演算

Arithmetic operations for determining space

《建築次元に落とし込み、具体的な機能を決定する》



この2段階の思考結果を、提案のコンセプトや建築に広げていく。

建築コンセプト Design Concept

更新され続けるお墓

The grave that continues to be updated

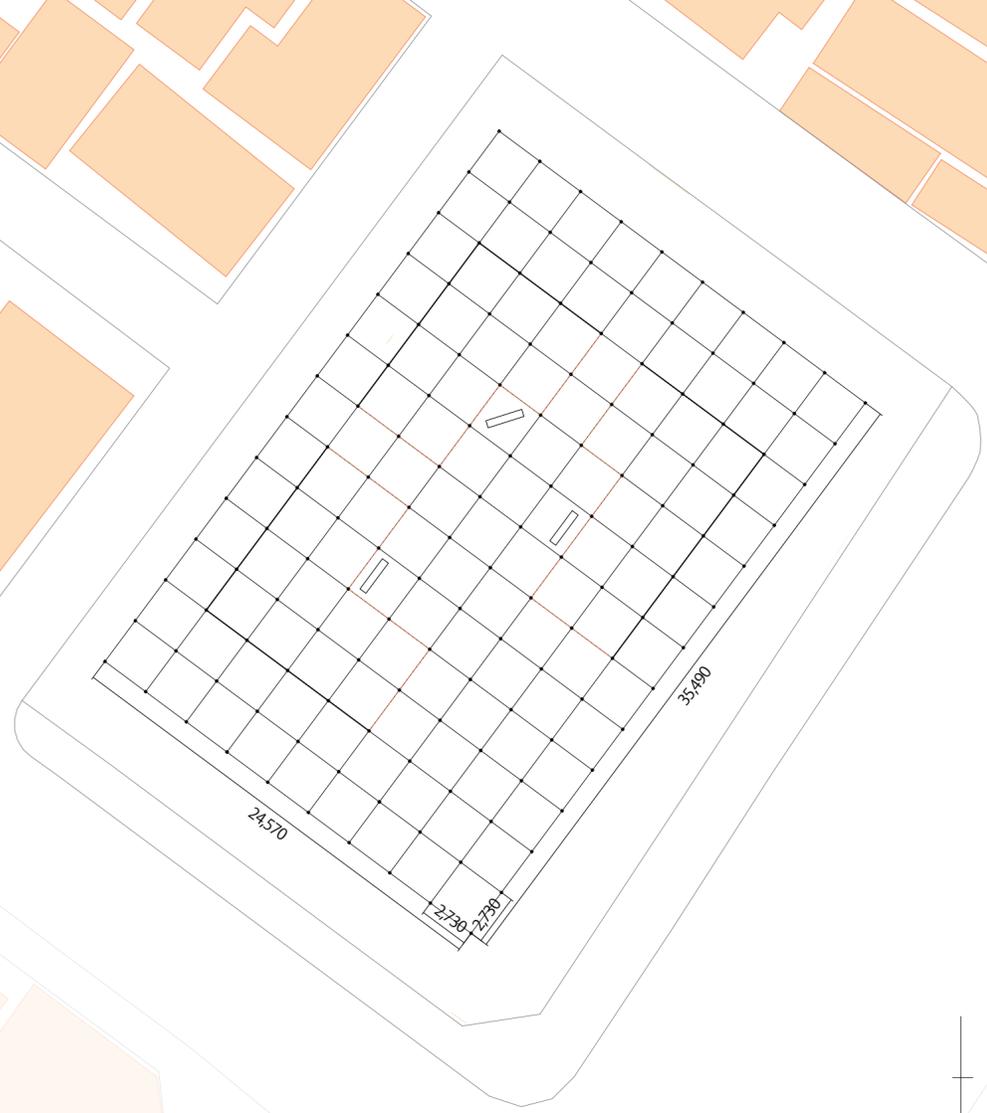
本設計は、「自分が死んだ後に、どんな場で過ごしたいか」を夢見て、自分が将来入るお墓を取り巻く空間を生前のうちにビルドするプロジェクトである。

自在に変化する可能性・余地が与えられた空間に、お墓を買った人たちが、自分の死後の居場所を設計する。

その人たちがお墓に入ると、今度は次の人たちが理想の死後の居場所を求めて、この空間を設計を引き継ぐ。

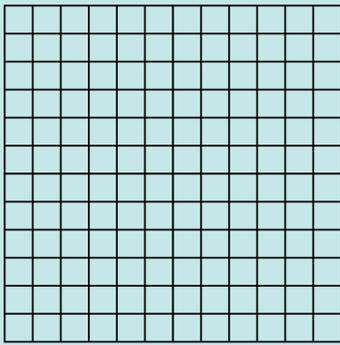
無名の墓予約者たちによって、絶えず場は更新され、死に対し能動的で開かれたコミュニティが生まれる。

目指すのは、社会的存在として、つながりの中で死を迎える機会の実現である。

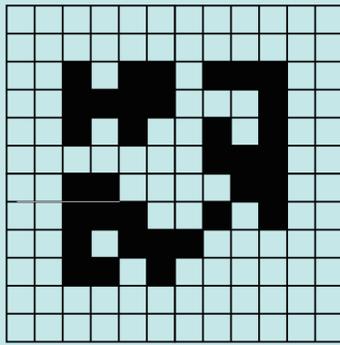


形状ダイアグラム Shape Diagram

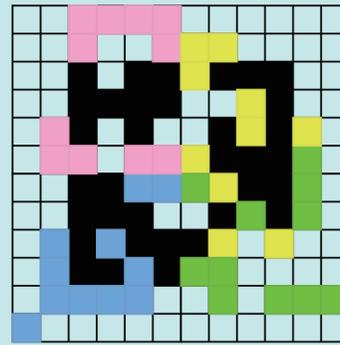
配置図 1/200
@東京都江東区清澄通り



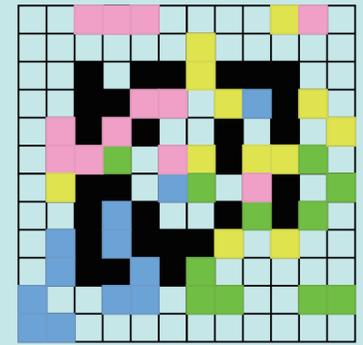
可能性グリッド
a grid of possibilities



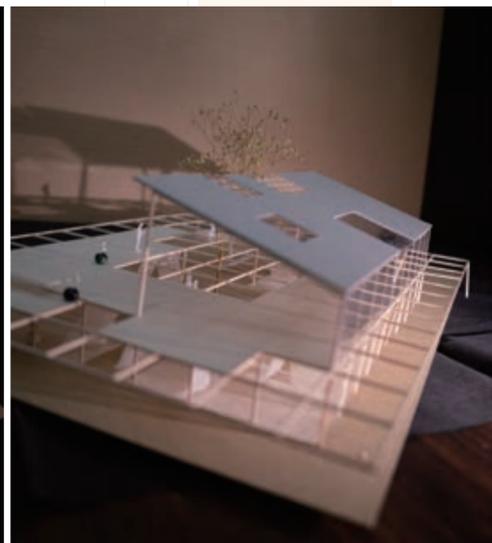
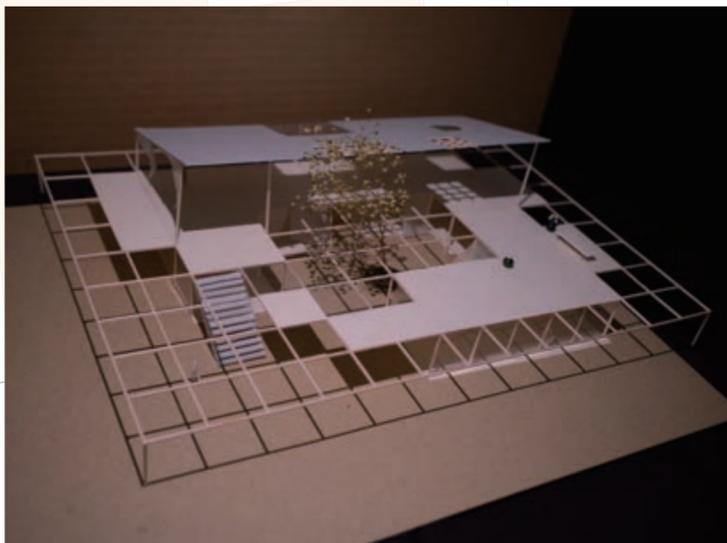
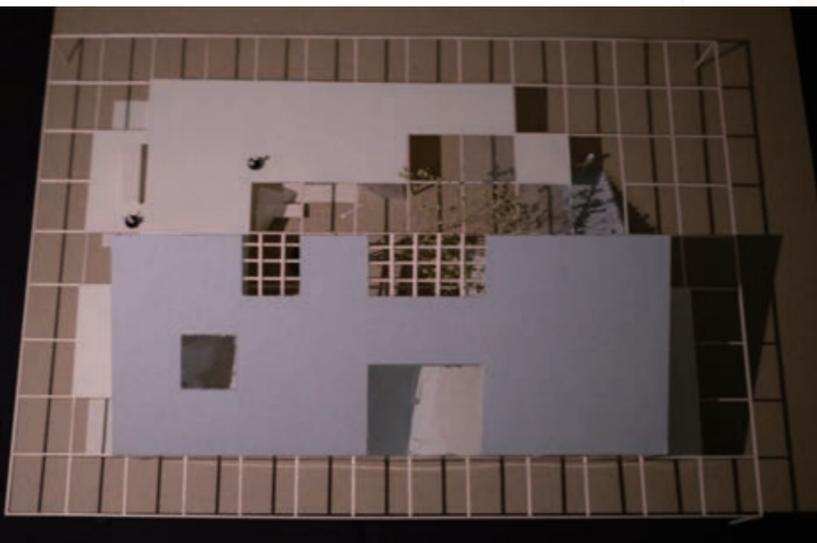
未完の完成?!
incomplete completion?!



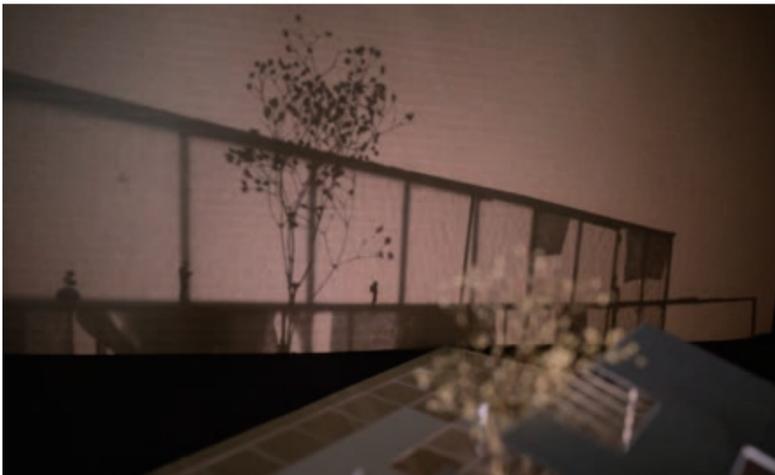
設計して、作って、設計して、作って...
design, build, design, build...



デザイナーのバトンリレーは
“設計コミュニティ”を創り出す
Designers' baton relay creates "design community"



空間を繋ぎつつ分けるカーテン



日常に溶け込む樹木型の合葬墓



変幻自在な余白を持つ空間



開放的な横の広がりを持つ